（学位論文の要約）

明治中後期における〈青年〉の成立と展開

和崎光太郎

青年と言うと、いつの時代にもいたありふれた存在のように思われるかもしれない。しかし今日では、青年の現状を嘆いたり、「青年とはかくあるべき」と理想的な青年像を打ち立てたりする青年論は、すっかり影を潜めている。では、そもそも青年とはいかなる概念なのか。本稿では、概念としての青年を〈青年〉、青年と呼ばれる者または青年を自称する者を「青年」とし、明治中後期において〈青年〉がいかなる存在として成立し、時代背景が移り変わることでどのように展開していったのかを論じた。

序章「問題の視角」では、〈青年〉を自明な概念として扱うことがなぜ問題であるのかを明示した上で、本稿の射程を明治 20 年代・30 年代と定め、さらに先行研究をレビューすることで、本稿で明らかにすべき課題を明確化した。

第 1 章「〈青年〉の誕生」では、〈青年〉がいかなる存在として誕生したのかを、〈青年〉論の旗手である徳富蘇峰の論説を中心に考察した。明治 10 年代末、熊本で民権私塾を開いていた蘇峰は、〈青年〉を真の「維新」の実行者として説いたが、まだその〈青年〉は、大人が教育し、導く対象だった。このような〈青年〉が大きく転換されたのが、明治 20（1887）年だった。同年に上京し雑誌『国民之友』を創刊した蘇峰は、自らのプロパガンダを打ち立てる中で、「第二の維新」を老人・大人を導き実行する「新日本の青年」を構築したのである。ただしこの「立志の青年」とも呼ぶべき〈青年〉は、〈青年〉の失敗作として創造された「壮士」を仮想敵としており、まだ自由民権運動末期の時代限定的な概念にすぎなかった。

第 2 章「〈青年〉の成立」では、時代限定的な概念として誕生した〈青年〉が、なぜ自由民権運動と蘇峰の「改革」論がともに下火になって以降も説かれ続けたのかを問い、明治 20 年代初頭に〈青年〉がどのような概念として成立したのかを明らかにした。明治 21（1888）年、帝国大学を頂点とするピラミッド型の学校階梯に順応する「学生」の登場を察知した蘇峰は、「立志」なき立身出世主義を体現する「学生」を仮想敵として、〈青年〉を説いた。仮想敵が、自由民権運動末期という時代背景のもとに創造された「壮士」から、近代学校制度の産物である「学生」へと移行したのである。その結果、〈青年〉は学校階梯が存在する限りにおいて説き続けることのできる概念へと転化された。一方で、創設されたばかりの第一高等学校の教頭木下広次も、明治国家を支える「器用」となるよう期待を込めて〈青年〉を語った。この〈青年〉は、蘇峰が説いた「立志の青年」とは期待の眼差しが向けられた存在という点で共通するが、その期待の内実が大きく異なっていた。ここに、第一義的に「期待すべき存在」としての〈青年〉が成立したが、その〈青年〉たりうるべき理想的な自己形成が何であるのかは、まだ語られていなかった。

第 3 章「『修養』論の誕生とその意味」では、〈青年〉らしくあるための自己形成が、いつ・どのようなものとして誕生したのかを明らかにするため、「修養」概念に注目し、それがいつ、どのように、いかなる概念として誕生したのかを論じ、「修養」の概念規定を試み

た。明治 20 年代半ば、「教育ニ関スル勅語」の謄本を奉読するという極めて形式的かつ画一的な徳育方法の代替として、「修養」が説かれ始めた。当初その論者は、松村介石などキリスト教系の論者であり、「修養」には当時の学校教育には取り入れられなかった実践、すなわち個人の内発的な道徳形成や、精神への配慮、世界史上における英雄の生き方から学び自己研鑽に資することなどが盛り込まれた。さらに日清戦争後には、「修養」が国民形成のための概念として、キリスト教系の論者以外によっても説かれるようになり、最初の「修養」書である松村介石『修養録』（警醒社、明治 32 年）において、「修養」は「青年」をあるべき〈青年〉へと内発的に自己形成させる駆動装置として確立された。

第 4 章「明治 30 年代前半における『修養』と〈青年〉」では、明治 30 年代前半に「修養」がどのように広まり、そこで〈青年〉がどのように展開されたのかを考察した。男子中等教育制度が整備され、中学生が急増した明治 20 年代を経て、明治 30 年代前半には、「修養」が引き続き既存の「教育」を批判する文脈で説かれながらも、いわゆる学生風紀問題への対処策として様々な論者によって広く説かれるようになった。その中で、「修養時代」という言葉に象徴されるように、「修養」に適したライフサイクルの一段階が存在するという認識が生まれた。さらに、「修養ある人物」や「修養がたらない」といった定型句の誕生により、「修養」が誰にも否定し得ないマジックワード化していった。一定の年齢層を指す「修養時代」という発想が、学生風紀問題への対応から構築され、『中学世界』などで理想的「学生」像をモデルとして「修養」せよと、説かれたのである。このことは、「修養」という〈青年〉の自己形成のあり方が、「学生」をモデルとして語られるようになったことを意味するのであり、その結果、〈青年〉と「学生」の棲み分けがより一層曖昧になった。明治 30 年代前半の〈青年〉は、明治 20 年代初頭のような「立志の青年」としての姿を失い、「学生」をモデルとして一定の年齢層として把握される「学生青年」とも言うべき存在へと移行しつつあった。

第 5 章「『青年期』概念の成立と〈青年〉」では、〈青年〉の心理的特質、つまり心理学という「科学」にお墨付きを与えられた根拠をもとに一定の年齢層として成立した「青年期」概念に着目し、それが、いつ、どのように成立したのか、そして「青年期」が語られる文脈での〈青年〉とはいかなる存在だったのかを論じた。明治 30 年代前半には、学生風紀問題や「学校病」が問題として立ち上がってきたことで、心理学者によって「青年」の心が科学的な観察対象とされ、「青年期」概念が西洋からもたらされた。「青年期」は、辞書的にはすべての「青年」が通過する心理的・生理的発達段階を意味しつつも、現実問題として論じられる際には中学生・高等学校生・師範学校生などの「学生」が念頭に置かれていた。「学生」をモデルとしながら、脱政治化・脱社会化された心理的・生理的な存在として「青年」を把握する新たな眼差しが、科学のお墨付きを得た上で登場したのである。つまり、「青年期」を生きる存在として語られた〈青年〉は、第一義的に「期待すべき存在」である「立志の青年」としての姿を失う一方で、学校に順応するよう「対処」の眼差しを向けられた「学生青年」としての姿を付与されたのである。

第 6 章「『煩悶青年』をめぐる語りと〈青年〉」では、明治 30 年代後半に社会問題化した「煩悶青年」をめぐる言説においては、〈青年〉がどのように変容したのかを考察した。「煩悶青年」を問題化する論理において、将来有用な「国民」となるはずの〈青年〉の失敗作が「煩悶青年」であり、そのような「青年」には何らかの対処が必要だとする点で、

各論者で共通していた。また、こういったことが雑誌上で議論されていく中で、高等学校生という特権的エリートに独特の現象だった「煩悶」の意味が、中学生の悩みにまで拡大され、「煩悶」は汎化されると同時に〈青年〉に本質的なこととされていった。明治 39(1906)年に文部省訓令第一号が出され、そこでは汎化・本質論化した「煩悶青年」への対応が「教育」という具体性をおびた。このことは、「対処すべき存在」とされた「学生青年」への「対処」が、明確に「教育」と位置づけられたことを意味する。その後、この訓令に触発された〈青年〉論が叢生し、「対処」としての「教育」のあり方が論じられる中で、〈青年〉を「期待すべき存在」ではなく「対処すべき存在」として見る眼差しが、確固たる地位を築いたのである。

終章「〈青年〉とはいかなる概念だったのか」では、各章で論じたことをまとめた上で、そこから何が見えてきたのかを明らかにした。明治 20 年代・30 年代には、2 つの〈青年〉像が登場し、説かれてきた。すなわち、明治 20 年代初頭に蘇峰が旗手となって打ち立てた「立志の青年」、そして「立志の青年」誕生の直後にその姿を現し始め、明治 30 年代に「立志の青年」を後退させ主役に躍り出た「学生青年」である。「立志の青年」は、真の維新がまだ達成されていないという歴史観を背景に持っており、第一義的に国家や社会体制の変革者となる「期待」の眼差しを受けた存在であり、「立身出世」や「進学」といった志向を持つ既存の体制に順応した生徒・学生とは相容れない存在だった。「学生青年」は、生徒・学生をモデルに構築されており、「期待」のまなざしを受けるもののそれは既存の国家体制・教育体系の枠内で達成される程度の「期待」であり、第一義的には、敷かれたレールを外れないよう「対処」の眼差しが向けられた存在であった。「期待」と「対処」の眼差しを同時に内在させる〈青年〉は、10 代後半から 20 代前半にかけての者たちをひとくくりにし、都合よく論じ分けることができるという点において、極めて魅力的な概念だった。このような〈青年〉の成立と展開が、男子中等教育制度の確立と「青年」の学校化、及びその学校化にともなう学生風紀問題などの社会問題の立ち上がりなど、その時々の時代背景によって推し進められたという事実は、重要である。というのも、〈青年〉は生徒や学生といった概念とは違い、一見して教育や学校から自由であるかのようなイメージが持たれるが、その成立と展開を追うことで、実は極めて教育的な概念として構築されたということが明らかになったからである。つまり〈青年〉とは、外界から遮断された教育機関の誕生、形式的徳育方法の蔓延、学校階梯の整備、そしてそれらにまつわる言説が生み出した、極めて教育的な概念であり、その教育が学校内だけに限らないという点において、むしろ学校への所属を条件とする生徒や学生以上に、教育によって包囲された概念なのである。